

# アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

## 3 回目

### あらすじ

小学生のトガシは生まれながらにして足が速く、周囲から一目置かれる存在であったが、走ることに楽しさや意味も見出せずにいた。ある日、何の取り柄もなく内向的な少年・小宮と出会う。小宮は「現実より辛いことをすれば現実がぼやけるから」と、遅いながらも死に物狂いで走る少年であった。トガシは小宮に「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」と語り、二人は互いの存在を通じて走ることを意味を見出し始める。しかし二人の関係は、小宮の突然の転校によって断ち切られてしまう。

高校に入り走ることをやめていたトガシと、記録だけを追い求め自らを研ぎ澄ませていった小宮。それぞれ異なる道を歩んだ二人は、インターハイの決勝で再会する。しかしその再会は、二人にとって思いがけないものとなった。

さらに10年の歳月が流れる。走る意味を見失ったトガシと、記録の世界に閉じこもる小宮。二人はそれぞれの苦悩を抱えながら、日本選手権の舞台で三たび巡り合う。100メートル。横一線に並び、一斉にスタートする。そのわずか10秒余りの中で、二人は走ることに、そして生きることに意味と向き合うことになる。

本作は、100メートルを走るという行為を通じて「なぜ走るのか」という問いが繰り返し投げかけられている。そしてその問いは、やがて「なぜ生きるのか」という実存的な問いへと深まっていく。勝敗や記録の向こう側にあるもの——生きることに意味を、走ることの中に見出そうとする人々の姿を描いた作品である。

## 今回のテーマ

### I. スポーツアニメの変遷とひゃくむ

### II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

### III. 高校時代のトガシと小宮について考える

### IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

### V. ガチになること——極上の 10 秒

## VI. まとめ

### I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

スポーツアニメは時代とともに変遷してきた。1960～70年代の「エースをねらえ！」では、宗方コーチという父性的存在のもとで主人公が孤独の中で鍛えられ、「いかにして強くなるか」が問われた。一方、2010年代の「ハイキュー！！」では父性的存在は薄れ、チームという共同体に抱えられる中で各々が主体的にプレーし、「いかに生き生きとプレ

一するか」が問われた。父性の導きから、横の支え合いへという変化は、時代の空気を映し出している。

では「ひゃくえむ」はどうか。100m走は横一線に並び一斉にスタートする。全員が対等な地点から走り出す。走っている間、走者は完全に一人である。コーチが導くわけでもチームメイトが支えるわけでもない。そしてこの作品が問うのは走ることを通じて「生きるとは何か」という実存的な問いである。人はどのようにして生きることを意味を掴み取るのか。それが本作の核心である。

## II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

### 1) 登場人物紹介

**トガシ**：足がとてつもなく速く、周囲から一目置かれる存在であった。しかし本人は走ることに楽しさや意味を見出しておらず、速さが周囲からの評価に関してトガシ自身にとって何を意味するのかは、まだ問いにすらなっていない。

**小宮**：内向的で対人緊張が強く、自分に自信を持てずにいる少年である。現実の辛さから逃れるために、「現実より辛いことをすれば現実がぼやけるから」と、より辛い走るといふ行為を自ら選び取った。遅いながらも常に死に物狂いで走り続けるその姿には、トガシの空虚とは対照的に、強い情念が宿っている。

### 2) ジュリエット・ミッチェルのきょうだい葛藤と同胞殺害幻想

精神分析において心の葛藤は主に親子関係、とりわけラカンの「父の法」に代表される垂直的な関係の中で論じられてきた。これに対しジュリエット・ミッチェルは、きょうだい関係という水平的な次元に着目し、「母の法」を提唱した。

幼い子どもにとって母との関係は世界のすべてであるが、新しい赤ちゃんの誕生によりその独占的な関係は永遠に失われる。この時、子どもの心には赤ちゃんを排除したいという激しい衝動が生まれる。母の法とはこの衝動に対する禁止であるが、それにより子どもは以前の母子関係には戻れないという喪失を自ら受け入れ、きょうだいと対等な存在として共に生きることを引き受けていく。母の法とは「排除したい相手と共に生きる」ことを

求めるものであり、その根底には喪失の受け入れという痛みが伴っている。

### 3) 母の法のフィールドで出会った二人

100m 走は横一線に並び一斉にスタートする。全員が対等な地点から走り出すこの構造は、母の法に基づくフィールドである。トガシによって 100m 走の世界に誘われた二人は、きょうだいの関係となり、このフィールドに入ることとなる。

子ども時代の二人は、それぞれ閉じた走りの中にいた。トガシは速いが走ることに何も見出しておらず、小宮は痛みで痛みを打ち消すような自傷的な走りをしてきた。しかし互いの存在によって走るものの質が変わり始める。ここにきょうだいトラウマの構造が現れる。小宮の台頭はトガシの存在証明を脅かし同胞殺害幻想が生じうるが、同時に小宮がいるからこそ走ることに意味が芽生えてもいる。この両価性が母の法のもとのきょうだい関係の核心である。

しかし小宮は突然転校し、関係はきょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま断ち切られる。トガシには処理されなかった喪失と罪悪感が残り、小宮にはトガシを追い越すことへの無意識的な恐れが身体次元に現れた。中学時代の怪我が癒えた後も全力で走れない小宮の姿には、父親殺しへの恐れが潜んでいたように感じられる。

トガシが小宮に語った「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」「それを決めるのは君だよ」という言葉は、父性の導きであると同時に、答えを持たないトガシ自身への言い聞かせでもあった。二人は共に、走ることを通じてどう生きるのかを考え始める入口に立っていたのである。その二人が高校生になり、新たな出会いを通じて、インターハイの決勝で再び同じ舞台に立つ。

## Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

### 1) 登場人物紹介

浅草 葵 (あさくさ あおい) : トガシが通う鰯第二高校陸上部の先輩部員。競技の才能には恵まれていないが、陸上に対して人一倍の熱い想いを持っている。廃部寸前の弱小陸上部にあっても、その情熱は失われることがない。トガシの中に眠る可能性を感じ取り、陸上部へと勧誘する。葵にとってトガシの速さや実績は関係なく、ただ走る存在としてのト

ガシを受け入れ、求めた。その姿勢が、走ることに意味を見出せなくなっていたトガシに再び走り始めるきっかけを与えることになる。

**仁神 タケル (にがみ たける)**：100m 元日本代表の親を持ち、中学時代には陸上界のスター選手として名を馳せていた。トガシが小学6年の頃、その活躍は広く知られていた。しかし常に勝つことを求められる重圧に押し潰され、走ることをやめてしまう。数年後、トガシが進学した鯖第二高校で陸上部の幽霊部員となっていた。偉大な父の影のもとで、走ることが父の期待に応える行為でしかなくなり、走る喜びを失ってしまった青年である。

## 2) ウィニコットの潜在空間 (potential space)

イギリスの精神分析家 D.W.ウィニコットは、人が創造的に生きるために不可欠な心の領域として「潜在空間 (potential space)」という概念を提唱した。

潜在空間とは、内的な空想の世界と外的な現実の世界の間にある「第三の領域」のことである。子どもの遊びを思い浮かべるとわかりやすい。たとえば子どもが棒切れを剣に見立てて遊んでいるとき、子どもはそれが「本当の剣ではない」ことを知っている。しかし同時に、遊んでいる間はそれが「剣である」という体験に没頭している。これは空想でもなく現実でもない、その間にある独特の体験の領域である。

大人にとっても、この潜在空間は生きる上で欠かすことができない。たとえば音楽に没頭しているとき、スポーツに夢中になっているとき、人は現実を忘れていたわけではないが、現実の重さから一時的に解放され、生き生きとした感覚の中にいる。ウィニコットはこの体験を「遊ぶこと (playing)」と呼び、人が本当の意味で自分自身でいられるのは、この潜在空間の中においてであると考えた。

ただし、潜在空間は一人で作り出せるものではない。ウィニコットが強調したのは、この空間が生まれるためには、安心して遊べる「抱える環境 (holding environment)」が必要だということである。赤ちゃんが母親に抱えられることで安心して遊び始めるように、人は誰かに受け入れられ、支えられているという感覚があって初めて、潜在空間の中で創造的に生きることができるのである。

## 3) 潜在空間の萌芽と父性的対象の世界

### ①小宮のケース

小宮は、九州の名門校で陸上を続けていた。しかし中学時代に負った怪我が癒えた後も、全力で走ることができないでいた。身体は回復しているにもかかわらず、走ることに

ブレーキがかかる。前回の番組でも議論したように、この恐怖の奥には、トガシを追い越してしまうことへの無意識的な恐れ——父親殺しの不安——が身体の次元に現れていた可能性がある。

そんな小宮に転機を与えたのが、財津との出会いであった。財津が母校を訪れ講演した際に、小宮は自ら質問に立つ。怪我が治ったのに全力が出せない、メンタルケアについて教えてほしいと。これは小宮にとって、自分の弱さを他者に開示する稀有な瞬間であった。財津は小宮に「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」と語りかけ、「やりたいことはなんですか?」と問う。小宮は「日本記録を塗り替えることです」と答えた。

前回の番組でもこのシーンを取り上げたが、この答えは小宮があらかじめ用意していたものではなく、財津の言葉に鼓舞される中で咄嗟に出たものではないかと考えられる。小宮はこの瞬間、トガシに代わる新たな父性的対象を財津に見出したのである。トガシという失われた父性的対象の代わりに、絶対王者である財津を理想化し、その記録を乗り越えることを新たな目標として掲げた。「日本記録を塗り替える」という宣言は、財津という父性的対象を超えていく決意であり、かつて身体の次元で止まっていた父親殺しの不安を、記録という目標の形に変換し、前に進もうとする試みでもあった。

しかしここに小宮の問題の構造が浮かび上がる。小宮は潜在空間を持たないまま、垂直的な関係——理想化された対象を見上げ、その対象を乗り越えるという構造——の中に自らを置き続けている。トガシから財津へと父性的対象は変わったが、その関係の構造自体は変わっていない。走ることを意味は「記録を塗り替えること」に集約され、確率と計算、傾向と対策の中に閉じこもっていく。そこには横に並ぶきょうだいとしての他者はおらず、小宮は一人孤独に、記録という数字だけを相手に走り続けることになる。

## ②トガシのケース

高校に入り、走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。廃部寸前の弱小陸上部でただ一人、陸上への情熱を燃やし続ける葵は、トガシに走ることを求めた。しかしそれは、速さや結果を求めるものではなかった。葵はただ「100mを走るトガシ」という存在を受け入れたのである。

この受け入れが、トガシにとっての抱える環境 (holding environment) となった。子ども時代、トガシは「速い子」として周囲から一目置かれていたが、それは能力に対する評価であり、トガシという存在そのものの受容ではなかった。しかし葵に抱えられることで、トガシの中に潜在空間が芽生え始める。走ることが、誰かの期待に応えるための行為でも、意味を問われる行為でもなく、ただ無心に没頭できる「遊び」になったのである。

後に海堂が「現実逃避」という言葉で語ることになるものの原型が、ここにあったと考えられる。ただしこの時点ではまだ言語化には至らず、トガシはそれを一つの感覚として掴んだにすぎない。

そしてこの潜在空間の体験は、言葉を介さず、一緒に走るという行為を通じて仁神タケルにも伝わっていく。仁神は100m元日本代表の親を持ち、常に勝つことを求められる重圧の中で走ることをやめていた。偉大な父の影のもとで、走ることが父の期待に応える行為でしかなくなり、そこに潜在空間の入り込む余地はなかった。まさにエディプスコンプレックスに押し潰された状態である。しかしトガシと走ることで、仁神はトガシに敗れたにもかかわらず、走る喜びを感じた。勝敗が絶対的な意味を持つ父の法の世界では、負けることは挫折でしかない。しかし潜在空間の中では、勝ち負けの向こう側にある走ること自体の喜びに触れることができる。仁神が再び走ることを決めたのは、トガシとの間に生まれた潜在空間の中で、父の法に支配されていない走りを初めて体験したからではないだろうか。

#### 4) トガシと小宮の再会 処理されなかった喪失の重さ

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。子ども時代に突然断ち切られた関係が、晴れやかな舞台ではなく雨の中で再び結ばれるということが、処理されなかった喪失の重さを暗示している。

決勝でトガシは小宮に敗れる。しかし走り終えた後、小宮がトガシに告げたのは「トガシくん、走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はずっとトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきた。「あのトガシに追いつき、追い越す」ことが小宮の走る意味であった。しかし目の前のトガシは、かつての走り方をしていない。葵に抱えられ、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」とは別の存在になっている。

小宮はトガシに勝った。しかし勝利は空虚であるように感じられる。追い越すべき理想化された対象がもうそこにはいないのだから。「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、この瞬間揺らぎ始めるのである。